

どうぶつたちの キャンプ 2



葵むらさき

目次

第43話	1
第44話	2

第43話

ふさふさの尻尾を揺らめかせながら、大地を歩く。

今日届いた情報を頭の中で整理しつつ、だが周囲の状況が見えなくなったりは決してせず、それでも一定の速度を保ちながら前進する。

とはいえ事態は予測を越えて複雑になってきたようだ。

まず、タイム・クルセイダーズの動き。当初は確かに、半月の頃奴らが大量して押し寄せて来るという情報が来ていた。それが、前倒しに次ぐ前倒しといった形で、今となってはまるで無法地帯のごとくに『奴らだらけ』となっている。

そしてその後――まるで後付けのように、ここ地球にて捕獲されていた『よその動物』たちが何頭かとんずらしたらしいという報せが来た。つまりそれを『再捕獲』するべく、タイム・クルセイダーズたちは大量して、前倒しにやってきたのだろう。

ふと、立ち止まる。竹の密生している場所だ。

かじりつく。

今日それは、微妙にひりつくような辛さを提供してきた。今日の竹は、辛い。

つまり、新しい情報が受け取られたということだ。

わしゃわしゃと噛み砕く。

うまくはない。

だがこの草本を噛み砕き味わうことで、不思議なことにこの世界で起きている現象事象が伝わってくるのだ。

「――レイヴンが……仲間と連絡を取った、か」咀嚼しながら呟く。「仲間を探すために、仲間と連絡を取ったんだ。それで……」さらに竹をかじる。

さきほどと同じ、微妙な辛さを感じるが、今度はそれに加えてどこか鈍い苦味も混じってきた。再びわしゃわしゃと噛む。

うまくはない。

「んー？」首を傾げる。「双葉の一匹が、よその動物と出くわした？」

その時、前方から同類の者が近づいてきた。

「よう」

「おう」声を交わし、互いの真っ黒な丸い目を見つめ合う。

後から来た者も、同様に竹をかじり取りむしゃむしゃと噛みつぶす。

「よその動物——翼を持ち鳥のように飛ぶ、と」後から来た者が咀嚼しながら呟く。「見たことないな」

「うん」先に来た者もさらに竹をかじる。「逃亡した動物なのかな」

「うーん」後から来た者も負けずにかじる。「——レイヴン？」

「ん？」

二頭はしばらくわしゃわしゃと竹を噛み続けた。

「レイヴンの探している動物である可能性あり、と」先に来ていた者がなおも咀嚼しながら呟く。

「そして双葉が引き続きその動物に随伴し移動している、と」後から来た者も咀嚼しながら呟いた。

「動物は、アラビア半島から東方面に向かっている、と」先に来た者が噛み終わった竹を呑み込んで言った。

「——こっちに近づいて来ている、と」後から来た者も噛み終わった竹を呑み込んで言った。

二頭はまた互いのまん丸で黒い目を見交わし合った。

やがてどちらからともなくまた竹にかじりつき、わしゃわしゃと咀嚼した。

「これ、うまくはないよね」先に来た者が言う。

「うん。まずいよね」後から来た者が言う。

「まあ……仕方ないよね」先に来た者がさらにわしゃわしゃ噛みながら言う。

「だね……植物からの情報を解説する役目だからね」後から来た者も負けずにわしゃわしゃと噛みながら言う。

「はは」先に来た者は噛み終わった竹を呑み込んで小さく笑った。「使命だね。我らレッサーパンダの」

「ふふ」後から来た者も噛み終わった竹を呑み込んで小さく笑った。「その通り。我らレッサーパンダの」

二頭は、互いに尻尾を持ち上げた。

ふさふさと毛並み豊かな、美しい縞模様を持つ尻尾だ。

「レッパン部隊に誇りあれ」二頭は声を揃えた。

第44話

「うん、なぜギルドがレイヴンを狙っているのかについては、国を挙げて考察し、場合によってはギルドへ直談判を試みるということです」

モサヒーからそういった報せが届いたのは、彼と実際には分かれてからしばらく時が経った頃だった。

「そうか。ありがとう。国にもそう伝えておいてくれ。それから」レイヴンは少し間を開け「可能ならば、ぼくの家族にも——すべて順調にいつてるから心配しなくていいと、伝えてもらえると嬉しい」

「うん、承知しました」モサヒーはしなやかに対応してくれた。「うん、じゃあレイヴン、アカギツネには気をつけて」最後に彼はそう言った。

「うん」レイヴンは返事をした後また少し間をおいて「アカギツネ？」と訊き返したが、その後モサヒーからの連絡は途絶えていた。

アカギツネ——

つらつらと考えつつも先へ進む。気をつける、とは、どういった意味を含んでの忠告なのか。

まず、無論アカギツネというのは、イヌ科だということもあるだろう。とはいえ他のイヌ科と比べると、牙を剥いて威嚇しないだとか縦長の瞳孔を持つだとか、なんといっても悲壮な鳴き声だとか、どちらかというとネコ科に似ている種族だ。人間とは、関わりを持つものもあるようだが人生を共に歩むという親密さではなさそうだ——

以前対話を持ったフェネックギツネと同様に、一定の距離と礼節を忘れなければレイヴンに深刻な影響を及ぼすことはないだろう。

では次に、アカギツネの何に気をつけろと敢えて注意喚起してきたのか？

ちらりと収容籠を見る。

コス、キオス、オリュクス。彼らをアカギツネに捕まえられないように、ということか？

無論その

リスクに対してはアカギツネに限らず、肉食の動物と接する際には全神経で油断なく警戒しなければならない。それはレイヴンの任務上、いちばん基礎に敷かれてあるコンセプトだ。

ならなぜ、敢えてアカギツネに、とその種族名を出すのであるか？

ごっふおおおおお

その時、遠くから何かの音が響き渡ってきた。

はっと音のした方を見る。

砂漠がつづくだけで特に何もいないようだ。だが、

ふぐおおおおお

再びその大音響は大気を震わせ走り抜けてきた。

「な、なんだ」レイヴンはいささかたじろいだ。

「うへえ」背後で突然声がした。「きた」

「えっ」びっくりして振り向く。

茶色の羽毛を持つ大型の鳥が、二本足で大地の上に立っていた。エミューだ。

ぶおおおおおおん

大音響はさらに続く。

「うーん」エミューは佇んだまま首を傾げた。「どうすっかなあ」

「あ」レイヴンはおずおずと声をかけた。「こんにちは」

「ん」エミューはレイヴンの存在に気づいた。「ああ、どうもっす」気さくにうなずきながら挨拶を返す。

ぐぼっふおごおおおお

大音響はもはや、何かに対する大きな怒りを帯びたような音となりますます大気分子たちをおののかせた。

「あ、あの、これ、は……」レイヴンは、特に怖れをなしている様子でもないエミューなら何か知っているのではないかと思いつねた。「何の音なんでしょう？」

「あ、これ？　うちの種族の女性の声」エミューは大音響が走ってきた方向を嘴でつついた。「誰か結婚しろって言うてるんだよ」

「けっこ」レイヴンは息を詰まらせた。「つまり、あの、プロポーズ？」確認する。

「うん。そう」エミューは片足で大地をちゃんと蹴った。「でもねえ……うーん」

「なにか、懸念があるんですか？」レイヴンはエミューの様子をみながら訊ねた。

「ははは」エミューは少し苦笑した。「うちの種族の女性たちってさ、プロポーズする時はすごく積極的なんだけど、いざ卵産んだあとは全部こっちに丸投げするんだよね」

「あ」レイヴンはまたしてもたじろいだ。「そう、なんですね」

「そう」エミューはもう一度地面を軽く蹴った。「卵産んだら、またプロポーズにいそしむのよ」

「え」レイヴンは思わず大音響の聞こえてきた方向を見た。「また？　誰に？」

「別の奴にさ」エミューは少し首を傾げた。「男の方は、孵化から子育てまで大分時間を使う必要があるからね。まあ種族保存のためとはいえ、やっぱり覚悟を固める必要はあるのよ」

「そ」レイヴンはエミューに目を戻した。「それは、そうですね」

ごぼおおおおお

「うん……まあ、ここで捕まるのが俺の運命ってことだな。行くよ」エミューはついに覚悟を固めたら

しく、大音響の方へ一歩踏み出した。

「あっ、あの」レイヴンは大急ぎで声をかけた。「アカギツネは、ご存知ですか？」

「ん」エミューは立ち止まり振り向いた。「ああ、もちろん。あいつら雛を喰おうとするから、要注意生物だよ」

「ああ」レイヴンは頷いた。「そうか……そうですね」

「アカギツネがどうかしたの？」エミューは親切にもレイヴンの事情を汲み取ろうとしてくれた。

「あ、ええ……仲間から、アカギツネに気をつけろと言われたんですが、どういう意味でそんなことを言われたのが今ひとつわからなくて」

「ふうん」エミューは少し間を置いて「君、レイヴン？」とだし抜けに確認してきた。

「えっ、あっ、はい、レイヴンです」レイヴンは驚きつつも自己紹介をした。

「動物探してるんだっけ」エミューは訊く。

「そうです」レイヴンは大きく頷く。

「それは、哺乳類？」エミューはまた訊く。

「——」レイヴンは一瞬戸惑ったが「ええ、地球の動物でいうと、哺乳類がいちばん近いです、ね」と肯定した。

「なら、あれじゃないか」エミューは上空に漂うレイヴンをじっと見上げて言った。「狂犬病ウイルス」

「あっ——」レイヴンは硬直した。それは彼の考察の範疇外にある項目だったのだ。

「ま、あいつに頼めばいいんじゃない」エミューはくるりと背を向けつつ助言する。「ディングにさ」

「ディング？」レイヴンが訊き返した時、すでにエミューは大きく踏み出しはじめていた。

「あいつら、なんかアカギツネのこと毛嫌いしてるっぽいからさ」張り上げられるエミューの声も、あつという間に小さく遠ざかっていった。

ふおぐおお おお おお おお

彼を呼ぶ『プロポーズ』は、彼の最後の挨拶の声を完全にかき消した。

どうぶつたちのキャンプ 2

著 者 葵むらさき

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
